43. 大・小アンチュル諸島

米西戦争の結果キューバは独立、隣の島イスパニューラ島はフランスの植民地ですから今回大地震に襲われたハイチはこの島の西半分、東半分はドミニカ共和国。ハイチの首都はポルトープランス、公用語はフランス語、被災地に入ったマスコミが各種の報道をしておりますから、もうお判りの通り、世界最極貧の国で更に追い打ちをかけるようにこの災害ですから、自力での再起は期しがたく世界中からの援助にすがりつくしかないでしょう。陸上自衛隊の施設部隊を派遣することが閣議で決まりましたが、重機を運ぶのに艦船で運んだら1ヶ月以上要するだろうと案じていましたら、防衛庁はこれら重機を運搬するのになんと最大離陸重量600トンという世界一の重量貨物機An-225（ムリーヤ）をウクライナからチャーター、この機で重機を運ぶことになり、2010年2月9日 成田に飛来し108トンを積み込み直ぐに飛び立ちました。見学に行こうとしていたのですが情報が入るのが遅く残念ながら見ることが出来ませんでした。

①

②

この飛行機は旧ソ連の全盛時代宇宙船を運搬するために開発されたもので、2機を製造中1機完成後、2機目は未完のまま製造打ち切りとなり、世界で唯一の大型輸送機なのです。あまりにも大きすぎるため定期的には運用できず、今回のような超重量物運搬時のみのチャーターに応ずるのみです。ハイチの1日でも速い復興を願うのみです。

③

ポルトープランスの沖合にあるウィンドワード海峡は北米東海岸とパナマ運河を結ぶ重要な航路なので何十回も航過しましたが、このポルトープランスに寄港したのは3回しかありません。但し荷役施設が貧弱なため1週間位荷役に費やしましたから、滞在期間は結構長くいたことになります。上陸し悪臭漂う小さな家屋の間を歩いていたら、突然目の覚めるような白亜の宮殿の様な建物が目の前に広がったので驚きました。銃を担った兵士が立哨しており異様な雰囲気だったのでアワテテて離れま

したが、先日の地震で崩壊した写真があったその大統領官邸でした。

このハイチという国は元はフランスの植民地でしたが、独立したのは早く、1803 年世界初の黒人共和国として誕生した輝かしい歴史を持っていますが、実は黒人の抵抗と黄熱病に悩まされたフランスの方が放棄して逃げ出したのが真相のようです。第二次大戦後デュヴァリエ家一族による 30 年におよぶ独裁が続き、1986 年全国的な暴動が勃発、大統領一族はフランスへ亡命、独裁政権は崩壊しましたが、次は軍事政権になったのですが、これがもっと悪で経済的な混乱、人権弾圧は更に激しくなり、其の結果小舟や手製の筏でのアメリカへの密航が後を絶たず、といっても簡単に航行できる訳ではなく、フロリダ半島沖合には強いメキシコ暖流が北上しており、これを乗り切るのは容易ではありません。ですからコーストガードが監視しており、また在米ハイチ人協会が船を出して援助しておりました。洋上で捕えた密航者は 2 万人以上、米軍のグァンタナモ基地（キューバ）内に収容したのが 1 万 4 千で満杯、監視の網をくぐり抜けアメリカ本土に不法に潜り込んだ人の数は数知れず、私が在勤していた頃の紐育でも密入ハイチ人による凶悪事件が続発でした。 しかもハイチ国内には 30 万を超える難民予備軍が待機していることにアメリカ政府は頭を抱え、ついにクリントン大統領がハイチ進攻を決め、進攻予定日を定めてから、カーター特使団を送り込み、軍事政権の中心人物、セドラ将軍、ビアンビー将軍、フランソワ警察長官の退陣を迫り、その後上陸した米軍が治安維持に努めるというシナリオでした。

1995 年 3 月　米軍 2 万人と国連軍（24 ヶ国）6 千名が上陸して治安回復に努めてからは後は徐々ですが治安が回復しアリスティド大統領就任後は安定化に向かったのですが、先日の大地震で判るように極貧国であることはには変わりなくそのままの状態でした。

しかし全ての国民が貧しい訳ではなく、私が訪れた時は金持ち（リシュ）階層と貧しい（ポプ）階層に分かれ、当然ですが圧倒的多数はポプです。リシュ社会は丘を登った高台にあり、ハイチのビバリーヒルズと言われているペティオンヴィルで鬱蒼とした木立の間に閑静な住宅があり、それに付随したショッピングモールや高級レストランがあり、さらに丘を登ると政府高官の大邸宅が続き、そのまた奥があって山間が狭いところに城塞のような塀があり将軍であり大統領の超豪邸がありましが現在はどうなっているのでしょうか。

もう一つこのハイチには是非探求したいモノがありました。それはハイチ独特の宗教である‘ヴードゥー教’という土俗信仰ですが、そのルーツはコンゴの神‘ンザンビ’（Nzambi）‘霊魂’という意味ですが、これがヴォドゥンとなり西・中部アフリカ諸国で信仰されていたのが、奴隷としてカリブの島に連れてきた人達が密かに信仰を続けていたのです。

ハイチはフランスが支配していましたからフランス人司教によりカトリック教の洗礼を受けることを強制されていたのです。従って表向きはカトリック、裏ではヴードゥー教を信仰し、やがてこれが合体し聖母マリアや聖パトリックの絵がヴードゥー教のエジリ（愛の精霊）とダンバラ（智の精霊）と二つの信仰は融合しているのです。これは各地で観られる現象で、キューバのサンテリア、ジャマイカのオベア、ブラジルのカンドンブレがその例で、宗教が強制された或いは弾圧された植民地や被征

服地では必ず起きた現象です。

しかし、このヴードゥー教は他からは怖ろしい宗教として知られています。我々も思い浮かべるのはハリウッド映画で定着してしまった「生き返った死体～ゾンビ」のゾンビはヴードゥー教の教義の中から蘇った生き霊がゾンビですから、ホラー映画で不気味さだけが誇張されてしまい大分誤解されていますが、ヴードゥー教とは、ロア（精霊）との交流によって個人や共同体が抱える問題を解決し社会生活を理想に近づけるようとする信仰ですが、この憑依現象が人に宿る霊魂が去り、その後にロアが入り込み其の肉体を支配する状態ですが、ロアの解釈が地方によって異なります。

ヴードゥー教には聖書や聖典は無く全て口承ですから教会や地方によって信仰形態が異なりますので、文字通りの土俗信仰となり文化人類学的には非常に困難な研究分野です。

貧しい階級の大半はヴードゥー教を信仰しており、それは故郷の大地アフリカを繋ぐ精神的な媒体であり、ロアは代々受け継がれてきた祖先の知恵なのだと解釈すると理解できます。私のハイチ訪問で最大の収穫はウンフォ（教会）やペリスティル(集会所）で行われた儀式をはるかに離れてですが覗かせてもらったことです。

我が国では重複立候補制度が導入され 1996 年の衆議院員選挙から小選挙区で落選しても比例区で復活当選した議員を「ゾンビ議員」と俗称していますが、ゾンビとは、死体を腐る寸前墓から掘り出し、ボゴ（司祭の一種）の祈りによって生き返らせ魂は壺に封印し、奴隷として永劫に働かせることですから、生けか返らせたのは確かですが、ゾンビ議員さん達はどう理解しているのでしょうか、凄いネーミングです。

その東隣の島がプエルトリコで、スペインの植民地だったため米西戦争の結果　アメリカの属領となり今日にいたっております。私がアメリカ船籍の貨物船に初めて乗船したとき室付のボーイさんが年輩のプエルトリコの人でしたが、‘風と共に去りぬ’での黒人奴隷がご主人様に仕えるように全てが‘イェッサァー’で仕えてくれ、初めて経験する私の方は冷や汗流して恐縮しておりました。

④

プエルトリコの首都サンフアンの地形は大きな入り江が先端が隆起据礁が半島のように湾を包み込み、見事な港と空港を造り、このエリアーは特別区で現地人立入禁止、米国が直接支配する区域になっておりアメリカの金満家達の別荘や豪華ホテルになっており、もの凄い豪邸が広い敷地の中に存在します。勿論本宅は東海岸にあり、週末となると次々と自家用飛行艇が舞い降りてきます。これが本

船が荷役をしている近くに着水するので、搭乗している人には興味なし、自家用飛行艇の英姿に見とれておりました。その先の自家用機専門の滑走路にも次々と飛来し、これまた殆どが双発のペラ機でいろんな型をしており機種の多さに驚きでした。

⑤

あまりの凄さにウィングで見とれていたら代理店の係員がやって来て曰く、飛行機で来る金満家よりもっと上はヨットで来る人だと言っておりました。ヨットといっても帆を張って航行するヨットではなく、豪華客船を縮小したような 1000 トン位の豪華船で勿論乗組員が運航している動く宮殿みたいのでやってくる金満家です。ともかくアメリカの金持ちは桁外れで文字通りアメリカンドリームです。インドやエジプト、ヨーロッパでもパレスかキャストルかと驚くような豪邸をみましたから上を見たら際限なし、下を見たらこれまた際限なし、両極端が同時に見られるのがこのカリブ海の島々です。

⑥

しかし最初から金満家であったわけではなく、コロンブスが新大陸を発見以前の中世の暗黒時代のヨーロッパの国々は実に貧しい暮らしをしていたのです。その様な暗い時代だったからこそ新大陸発見の報に沸き立ち、一攫千金の夢に取付かれた男達がスペインから続々とやカリブの島々を中継地として中南米に侵出し、中南米の密林の中でひっそりと独自の文化を営々と築き上げてきたモンゴル系のインデオの人達、戦うことさえ満足に知らなかった人々を銃と馬で追い散らす白人の一団、ついにはインカ帝国を滅亡に追い込んだのですが、少数のスペイン人の一団で絶対多数のインカの人達をどうやって滅亡させたのかと、当然の疑問ですが、これはインカの人達の部族毎の対立を利用して戦わせた

⑦

り、なにより影響があったのは伝染病です。地中海沿岸諸国では対岸のアフリカから入ってくる伝染病に何世代にも渡って被害に遭ってきた故にその子孫には抗体が出来ていましたが、他との交流が全く無かったインカ帝国の人々にとって白人との接触は、即座に罹病、蔓延で多数の人々が命を落とし、戦う意欲さえ失ってしまったのです。

征服した彼らの次なる仕事は、インカの財宝を　せっせと本国へと運びだすのに精をだしました。本国への運び出しルートは大西洋岸からではなく、現在のペルーやエクアドルの太平洋岸から積み出し、これをパナマ地峡やメキシコのアカプルコで揚げて、次は陸路で中央高原を超えてカリブ海に面したベラクルスで再び船積みしてスペインに向かうルートで、其の中継基地はキューバのハバナ港です。

しかしインカの財宝が無限にあるわけではなく、それでも白人達がアマゾンの奥地を彷徨したのはエル・ドラード伝説を信じたからです。エル・ドラードとはスペイン語で‘黄金の人’という意味ですが、16 世紀頃までアンデス地方に存在したチブチャ文化（ムスイカ文化）の儀式として土地の首長が全身に油を塗ってそこに金粉を張り付けた、これが黄金の人の正体で、コロンビアのグアタビーア湖に飛び込んで湖底にある永遠に栄える国への入り口を探す儀式です。その噂を聴いたコンキスタドールの白人達は、これぞ黄金郷と確証を高め、その後約 300 年間にも渡って白人達は探し求めとめたのですから黄金に対する執念は凄いものです。また無責任な地図製作者が世界地図にこの黄金の国を書き加えているのですから余計信じてしまったのです。ですから黄金の国ジパングへ命を懸けても行こうとしたのも頷けます。

⑧

この伝説の終焉は 19 世紀初頭、アレクサンダー・フォン・フンボルトによるアンデス・アマゾンの踏破により地図上から黄金の国は夢・幻と消えてしまったのです。

それとは別にスペインには錬金術という秘法をイスラム圏から入手しておりました。これはイベリア半島のゴルドバを中心とした南側はイスラムの王朝が 800 年も続き、キリスト教徒のレコンキスタ（国土回復運動）が急速に進展し、1492 年イスラム教徒最期の砦グラナダが陥落、それから僅か 3 ヵ月後にはコロンブスの新大陸発見になるのですからスペインの強運はここから始まった言えます。

⑨

1545 年スペインは現ボリビアの首都ラパスから南東約 440km のアンデス山中、標高 4000m という高地に銀の鉱脈を発見、これがポトシ（Potosi）鉱山で、現在でも世界最高地の街としてポトシ市があります。当時は無人の高原でしたから、各地からインデオの労働者を駆り集め、強制労働をさせた

わけでこれが組織的な奴隷制度の始まりと言われております。鉱脈が枯れ果てるまで4万5千トンの銀の生産があったといわれおり、これをリマ経由でペルー沿岸で積み出され太平洋岸を北上、パナマ地峡を通って南米のカルタヘナからの積み出しと、メキシコのアカプルコで陸揚げされへ、そこから陸路、馬、驢馬で運ばれベラクルスで

⑩

再度船積みでスペイン本国へ送られたのですかのですが、海賊の襲撃から護るため再度積み替え船団を組み護衛らこの基地が主にハバナ、その他はプエルトリコ、サント・ドミンゴの各港です。

さらに1546年にはメキシコのサカテカス（Zacatecas）銀山。1558年メキシコ・グァナハァト（Guanajnato）銀山を発見しておりますから探鉱技術も優れていたようです。

積み出された金銀は一旦キューバのハバナ港に運ばれ、ここで船団を組んでスペイン本国へ航行するわけですが、コースの選定には島々の位置、環礁、海流、潮の干満、風向・風速等に考慮しますから帆船のコースはおのずと限定されます。従ってそれを前もって読んだ海賊船は待ち伏せしているわけで、海賊映画のように洋上で偶然発見した財宝船を追いかける事は実際は不可能です。風力を動力とする帆船は速力に差は殆どありませんから､追いつくことは無理な話です。ですからスペイン船の行動を読んで素早い対応が執れることが必要条件であり、海賊の首領になるには航海者としても優秀な人物だったのでしょうし、部下の掌握、服従も必要であり、気象観測等全てに秀でた人物でなければとても務まらない、ただ乱暴・凶悪だけでは絶対になれない地位だと推察します。

⑪

更にはハバナのような財宝の集積港を襲う海賊もいました。海賊としてはこの基地の港には確実に宝物があるますから襲撃することが一番収穫が多いのです。ですからフランス系ユグノー教徒海賊は度々ハバナ基地を襲撃して激しい戦闘を繰り返しておりました。このハバナは港口が狭く口を北を向けた首の長いフラスコの様な形をしており内湾は広く防御には適した地形だったためにスペインはここをインディアスの要とし、港口の西側にはプンタ要塞、東側にはモロ要塞を構築し、両要塞から侵入阻止用に留め金で結び

⑫

つけた巨大の木の鎖が渡されて港全体を要塞化して海賊に対処したのです。現在でも東側のモロ要塞はそのまま保存されており、西側のプンタ要塞跡は公園になっています。　私もハバナ入港の度にモロ要塞に出かけ、砲台から眼下に広がるカリブ海を眺めると要塞守備兵になったような高揚感があり、フロリダ半島のタンパ付近にあった根城からのユグノー海賊の船が水平線上に現れ、ドグロマークの旗をなびかせながら襲ってくるのを迎え撃つスペイン兵の気分になりきっておりました。

⑬

かくして財宝を入手したスペインがヨーロッパ唯一の裕福な国家として権勢を誇ったのも頷けます。この外にもセロ・リコ鉱山、ティオ鉱山が開発され三大鉱山として採掘が続いたのですが、近年の調査によると鉱山労働者として酷使された奴隷の数は延べ 800 万人といわれ、当時は人食い山として怖れられるほど酷使による犠牲者が多かったのです。

1558 年にはグァナファト銀鉱山が開発され、18 世紀には世界の銀産出の 1/3 はこの鉱山からペルー採掘された位の産出量でメキシコとリマに造幣所を造り、ここで板状の金銀に刻印したコブイン（金銀の塊）を製造したのです。場所はメキシコ・シティから北西へバスで 5 時間のところにあるグァナファト市はメキシコ一の美景都市とされるコロニアル都市として世界遺産に登録されております。

ここで産出された銀の一部がフィリッピンのマニラに運ばれ、当時マニラにはスペインの総督府がありましたから、ここから中国との交易、特に絹の買い付けに使用されておりました。マゼランの世界一周の探検航海で南米の南端（後にマゼラン海峡と名付けた）を廻って太平洋に出て苦難の航海の末辿り着いたのがフィリッピンのレイテ島の近くにあるマクバン島に漂着した後、レイテ島に行ってしばらく滞在しておりましたが、やがて戦いになりマゼランは殺され、残った部下はなんとか航海できそうな 1 艘で逃げだし、途中パラワン島で大量の香辛料を買い込み、無事本国へ帰着、フィリッピン（未だ名称はありません）発見を国王へ報告し、当時の国王はフィリップ二世でしたから、自らの称号を与え‘フィリッピン’と命名、大船団をマニラへ送り込み領有宣言をしたのです。ここからフィリッピンの数奇な運命が始まるわけです。

当時のスペインは拠点を設置すると更に近隣を探索しキリスト教の布教という名目で植民地を拡大していくことを国是としておりました。ところがマニラにいおいたスペインの総督府はフィリッピン域内から更に拡大しようという動きはありません。

我が国との関係をみましょう。マニラにスペインの総督府を開設した頃、我が国は戦国時代に入りかけていた頃で鉄砲に用いる硝石を堺衆の南蛮船を用いてマニラとの貿易に励んでおりました。勿論硝石は南米から持ってきたものですが直接我が国には持ち込まなかったのは当時世界一の武装国家であった我が国を刺激したくない思惑があったのでしょう、なにしろマニラの総督府を護るスペイン兵

は約 500 名、宣教師を送り込む程度で高圧的名態度は全くとってなく、秀吉に書状を送り、明朝を撃ち果たせばアジアの帝王になるでしょう等、さかんに煽て上げております。そこで秀吉の野心は燃え上がりが朝鮮半島に送り込んだ兵力は約 10 万、しかも当時国内で所有していた銃は 10 万丁、ヨーロッパ全土でも 5 万丁程度しかなかったのですから、この辺が常に近隣との力関係に悩まされてきたヨーロッパの国々は外交に長けています。その後のキリスト教徒弾圧、宣教師の処刑がありましたが、沈黙のまま、もしよその国で行えば侵略の口実となって即植民地にされていたでしょう。当時の日本は重武装の国家だったのですが、その後、江戸幕府の鎖国により急速に弱体化していきます。

写真・絵

① キューバ島の東側にあるのがイスパニューラ島の西半分がハイチ共和国、東半分が　ドミニカ共和国。キューバとハイチの間にあるのがウィンドワード海峡で、パナマ運河とアメリカ東沿岸港への通り路です。

② ハイチ国旗

③ An-225（ムリーヤ）　世界最大の輸送機、1988 年完成、世界で 1 機しか存在しない、ウクライナ共和国　アントノフ航空所属、最大搭載可能 300ｔ、巡航速度 800km/h。

④ プエルトリコ島サンファン市の高級別荘地区、専用のエアポート、ヨットハーバー

⑤ 超豪華客船専用の岸壁があります。

⑥ 別荘地帯の一部

⑦ 南米の銀山から掘り出した財宝を運ぶルートは、南米太平洋岸から船積みし、パナマ地峡付近、現メキシコのアカプルコ付近で陸揚げし、陸路馬やロバの背でカリブ海側のベラクルスへ運び、再び船積みしてハバナその他の港で船団を組んで本国へ向かった。

⑧ エル・ドラード伝説の基とされる黄金の儀式を模した装飾品（博物館所蔵）

⑨ 8　Ｅｓｃｕｄｏｓ金貨　1700 年頃、メキシコで発行されたもの（イミティション）

⑩ ハバナ港に入港するには外洋から細長い水路を通って入ります。入港時の左舷側モロ要塞、右舷側がプンタ要塞で海賊の襲撃を防いでおり、その遺跡がそのまま保存されております。モロ要塞の屋上砲台がカリブ海へ向かって砲列を敷いております。

⑪ 海賊映画の 1 シーン。

⑫ ハバナ港口、モロ要塞の遺跡、要塞の内部も見学でき、良く保存されているのには感心しました。地下は迷路のようでしたが、海賊を捉えた時の牢屋もありました。写真の灯台は新しく建造したものです。

⑬ モロ要塞の反対側にあるプンタ要塞跡地で、大砲が 1 基記念に置いてあるだけで、公園になっております。向こう側に見えるのが⑫モロ要塞、水路の幅は 250m 位で海賊の侵入を防ぐため、港口を閉じる設備があったそうです。ハバナ港 左上が港口で上がモロ要塞　下がプンタ要塞ここは公園で、その下は繁華街港内は非常に広く天然の良港、施設も良好です。水路

通過時右舷側からハバナ市街地を臨む、手前の広場がプンタ要塞跡地で公園と散策の小径があり、市民の憩いの場所です。プエルトリコ島　小アンチル諸島　プエルリコ島の東端から時計周りで小さい島が並んでおり、米・英・仏・オランダ領の島々と、独立をしている島が並んでおり、上の写真はオランダ領の島で、ハウステンボスの様なオランダの街がカリブ海の小さな島にありますから歴史は本当に面白ものです。

漢字の知識　（ドコノ国トドコノ国デショウカ？）

中越戦争、日土友好、日独伊三国同盟、米西戦争、日対伯戦、日墨会館、泰緬鉄道

氷島（アイスランド）	愛蘭（アイルランド）	阿弗利加（アフリカ）
亜米利加（アメリカ）	亜爾然丁（アルゼンチン）	伊蘭（イラン）
埃及（エジプト）	英吉利（イギリス）	伊太利亜（イタリア）
印度（インド）	和蘭陀（オランダ）	柬埔寨（カンボジア）
加奈陀（カナダ）	濠太剌利（オーストラリア）	墺太利（オーストリア）
玖馬（キューバ）	希臘（ギリシャ）	新加坡（シンガポール）
瑞西（スイス）	瑞典（スエーデン）	西班牙（スペイン）
露西亜（ロシア）	泰（タイ）	西蔵（チベット）
智利（チリ）	丁抹（デンマーク）	独逸（ドイツ）
土耳古（トルコ）	芬蘭（フィンランド）	比律賓（フィリッピン）
伯剌西爾（ブラジル）	仏蘭西（フランス）	越南（ベトナム）
秘露（ペルー）	白耳義（ベルギー）	波蘭（ポーランド）
葡萄牙（ポルトガル）	馬来西亜（マレーシア）	緬甸（ミャンマー）
墨西哥（メキシコ）	蒙古（モンゴル）	新西蘭（ニュージランド）
諾威（ノールウェー）	巴奈馬（パナマ）	布哇（ハワイ）
洪牙利（ハンガリー）	暮利比亜（ボリビア）	猶太（ユダヤ）
錫蘭（スリランカ）		

世界の都市

巴里（パリ）	倫敦（ロンドン）	伯林（ベルリン）
羅馬（ローマ）	剣橋（ケンブリッヂ）	牛津（オックスホード）
羅府（ロスアンジェルス）	桑港（サンフランシスコ）	聖林（ハリウッド）
華盛頓（ワシントン）	紐育（ニューヨーク）	盤谷（バンコック）
浦潮（ウラジオストック）	雅典（アテネ）	

アイルランド
アメリカ
イギリス
イタリア
イングランド
インド
オーストラリア
オーストリア
オランダ
カナダ
カメルーン
サウジアラビア
シンガポール
スイス
スウェーデン
スペイン
スロバキア
セネガル
タイ
チュニジア
デンマーク
ドイツ
トルコ
ナイジェリア
ニュージーランド
パラグアイ
フィリピン
ブラジル
フランス
ブルガリア
ベルギー
ポーランド
ポルトガル
マレーシア
メキシコ
ロシア
韓国
台湾
中国
南アフリカ
日本